

## 51 トルーマン 『史的衣装』 C.B.コ克蘭の前文付き

**Truman, Nevil. Historic costuming**, with a foreword by C. B. Cochran. London, Sir Isaac Pitman, (1936) 1956. 152p. with illus. 6 col. plates 25.3×19.0 cm <383.13-T>  
Hiler p. 854

著者は本書をイギリス演劇連盟の創始者で会長のG. ホワイトワースに捧げている。このように本書はもともとイギリスの舞台衣装のために書かれたもので、学術的に意図されたものではないけれども、記述の内容と形式、とりわけその要領からいって、イギリス服装史の入門書として最も優れたものの一つになっている。

有職故実に発したわが国の服装史研究では、とりたてて舞台衣装のために書かれた類書は極少だけれども、ヨーロッパでの服装史の研究は、もともと演劇衣装と一つになって発達し、促進されてきた。というのも、19世紀初期の舞台では、シェクスピア劇がまだ19世紀の衣装で演じられていたが、ロマン主義運動の勃興と共に科学的実証性が重んじられるようになると、史的衣装への関心も次第に高まりをみせてくる。実用知識普及協会監督の下に「楽しい知識文庫」の一冊としてロンドンで発行された『英国服装史』History of British costume. 1836 <383.133-P>は、事実上プランシェ (J. R. Planché) によって進められたものであるが、その最も初期的成果なのであった。こうして、やがて19世紀後半には西洋服装史研究の黄金時代を迎えることになる。

このように、舞台衣装とは不可分になっている西洋服装史の中でも、専門家にもアマチュアにも好個とされ、最も簡潔にして要を得た記述によって類書中の白眉とされている本書は、初版以来今日まで十数版を重ねている事実によっても知られる。また、トルーマンのこうしたユニークな業績は、ロラン・バルトの『モードの体系』でも、歴史とモードの通時態 (Histoire et diachronie de mode) を説く一例証として高い評価を得ているのである。

全31章から成り、第1章の序説では「衣服が人間なのだ。人間の個性を印象づけるのが衣服だとすれば、それが歴史や生活の魅力的部分だといえるのではないか。」と述べて服装史の役割を強調している。各章は大体、概説、衣服 (男子・女子)、脚部、足部、頭髪、帽子、農民、などとなっている。ただし、1966年以後の第2版からはグリーン (R. M. Green) による1910年から1965年までの補遺が加わった。したがって第29・30章が聖職服、第31章武装略史、付録に服装様式変遷図がある。更に独自なのは、各章の末尾に要約 (summary) があり、男女に分けて部分ごとの変化の特徴が簡潔に記されているのは本書の特徴でもある。(石山)